

目指す学校像	児童一人ひとりが期待感をもって登校し、満足感をもって下校できる学校
重点目標	1 個別最適な学びの充実と基礎基本の定着及び「できる」「わかる」授業の実践 2 自己肯定感の育成 3 地域に愛着を持つ児童の育成 及び 地域の教育活動への参加促進 4 ICTを活用した授業実践の充実 及び 学校課題研修の充実

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価							学校運営協議会による評価		
年 度 目 標					年 度 評 価			実施日令和 年 月 日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等	
1	(現状) ○では、国語、算数とも全国・市の平均正答率を下回っている結果である。 ○同上調査では学習が楽しいと与える児童の割合が4教科とも市の平均回答を上回っている。 (課題) ○全国学力・学習状況調査の分析結果から、国語の書くこと及び算数の基礎基本に関する設問について課題がみられる。 ○児童が「できる」「わかる」を実感し、自己肯定感を味わわせ、自己表現力を向上させることが課題である	・個別最適な学びの充実と基礎基本の定着	①ドリルパークやスタディサプリを活用し、児童個人の課題を明確にして取り組むようにさせる。 ②計算タイムの時間などで基礎基本を繰り返し、定着を図る。	①児童一人ひとりのドリルパークやスタディサプリの進捗状況を把握しながら、取り組ませることができたか。 ②毎週水曜15分間の計算タイムが計画的に実施できたか。					
		・「できる」「わかる」授業の実践	①全学年の算数の時間に少人数指導教員を配置し、個に応じた指導を行う。 ②児童主体の「さいたま市『アクティブラーニング』型授業」を展開する。	①自校算数テスト「知識・技能」平均正答率80%以上、「思考力・判断力・表現力」平均回答率75%となったか。 ②「よい授業」集計システム「児童生徒の活動」で1回目より2回目の結果を向上させる。					
2	(現状) ○全国学力・学習状況調査において「学校に行くのは楽しいと思いますか」の質問に肯定的な回答をした児童の割合は全国・市を上回っている。 (課題) ○「心と生活のアンケート」で他者信頼や自己信頼が低い児童が各学年に複数名いる。	・自己肯定感の育成	①毎月全学年対象の生活アンケートを行い、児童一人ひとりの状況を把握し、面談を実施する。 ②一人ひとりが役割を意識し、認め合う縦割り活動を充実させる。	①「心と生活のアンケート」で他者信頼・自己信頼を高めることができたか。 ②児童縦割り活動振り返りアンケートで、活動充実の項目が90%以上となったか。					
		・自分たちが住む地域に愛着をもつ児童の育成	①カリキュラムマネジメントを行い、地域参加の学習を教育課程に組み入れる。 ②地域の人たちにも、あいさつができるようにする。	①地域に住む方々が、授業に参加することができたか。 ②学校評価児童アンケート「学校の外でも、お家の人たちや地域の人たちにあいさつができたか」75%となったか。					
3	(現状) ○昨年度、学校運営協議会準備委員会で育てほしい児童の姿について熟識し地域に関心をもって関わることができる児童を学校と家庭と地域で育てていくことを共有した。 (課題) ○コロナ禍で、地域からの教育活動への参画が途絶えたり、減少したりしている。	・地域の教育活動への参加促進	①年3度実施の学校運営委員会で熟議を重ね、育てたい児童像の実現に向けた方策を具体化する。 ②学校行事を感染防止対策の徹底を行いながら、地域に公開していく。	①学校評価アンケート「学校は保護者、地域の思いや願いを学校運営に反映させることができたか」の肯定的回答80%以上 ②学期毎の地域関係者への学校行事の公開					
		・ICTを活用した授業実践の充実	①ICT活用を取り入れた研究授業・研究協議を毎学期行う。 ②ミライシード・スタディサプリの活用に係る研修会を毎学期に行う。	①児童アンケート「ICTを活用」の項目で肯定的回答平均90%以上になったか。 ②全ての教員が日常的にICTを活用する状況になったか。					
4	(現状) ○ミライシードを活用した授業実践の報告会を開くなど、AARで自走する体制ができた。 ○校内課題研修では、活動計画を立て、計画的に組織で進めている。 (課題) ○授業実践からのフィードバックが十分でないところが課題である。 ○ICTの活用の頻度に教員間で差がみられるのが課題である。	・学校課題研修の充実	①毎学期に1度、指導者を招聘しての研究授業・研究協議を行う。 ②研究授業の実践を通してA(見通し)→A(行動)→R(振り返り)のサイクルを自走させる。	①学期に1度の指導差を招いた研究授業が実施できたか。 ②学校評価「研修」に係る項目の肯定的意見90%以上となったか。					